再構成と非定形節における機能範疇の出現

田　中　智　之

1．はじめに

いくつかの現代ゲルマン語やロマンス語において、通常は節の境界を越えて適用されない統語操作が、不定詞節の境界を越えて適用されることがあり、そのような透明性現象は再構成（re-structuring）と呼ばれている。(1)−(3）では、それぞれ受動化、かき混ぜ（scrambling)、接語化（cliticization）によって、斜体で示したコントロール不定詞節の目的語が主節に移動している。Rizzi（1982）はイタリア語におけるこのような透明性現象を説明するために、主節動詞と不定詞節の動詞を合体して複文を単文にする再構成規則を提案したが、その後の研究において問題点が指摘され、現在では再構成規則は存在しないという立場の下で、再構成を引き起こす主節動詞の特性、および不定詞節のサイズという観点から多くの研究がなされている。

（1）dass *der Traktor* [zu reparieren] versucht wurde
that the tractor to repair tried was
'that they tried to repair the tractor'　（Wurmbrand 2001: 19 / German）

（2）dat Jan *het boek* heeft geprobeerd [in ontvangst te nemen]
that Jan the book has tried in acceptance to take
'that John tried to take delivery of the book'　（Broekhuis, *et al.* 1995: 100 / Dutch）

（3）Gianni *gli* continua [a raccontare stupide storie]
Gianni him continues to tell stupid stories
'Gianni is continuing to tell him stupid stories'　（Rizzi 1982: 4 / Italian）

さらに、イタリア語の小節（small clause）においても同様の再構成現象が観察され、（4）では小節述語の内部から主節への接語化が起こっている。このような事実を説明するために、Rizzi（1986）は主節動詞と小節述語の主要部を同一指標付けすることにより、複雑述語（complex predicate）が形成されると提案している。これに対して、Stowell（1991）は小節述語の主要部が主節動詞に顕在的に移動することにより、複雑述語が形成されると主張している。

（4）*gli* ritenevo affezionata anche tua sorella
to-him believe affectionate also your sister
'I believe your sister also affectionate to him'　（Rizzi 1986: 82 / Italian）

(1)−(4）に対応する現代英語の文はすべて非文法的であるが、Visser（1973)、Takahashi

(1982)、Fischer (1990)、Denison (1993)、Wurff (1997)、Los (2005) 等の先行研究では、古英語と中英語の不定詞節において再構成現象が見られることが指摘されている。しかし、それらの文献におけるデータは散発的であり、英語史における再構成の分布の全体像が明らかにされておらず、また、英語史のある時期になぜ再構成が消失したのかに関する原理的な説明が与えられていない。さらに、小節における再構成については、英語史に関するこれまでの文献においてほとんど議論されていない。

本論文では、*The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (Kroch and Taylor 2000; PPCME2)、*The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (Kroch, Santorini, and Delfs 2004; PPCEME) を用いて、英語史におけるコントロール不定詞節と小節における再構成の分布について調査し、極小主義理論の枠組みにおいて機能範疇の出現という観点からそれに関する説明を試みる。具体的な提案は (5) にまとめられているが、コントロール不定詞節においては、不定詞標識toが語彙範疇Pから機能範疇Tに再分析された結果、コントロール不定詞節の*v*Pがフェイズとしての位置付けを確立し、さらに不定詞主語としてPROが認可されるようになったので、再構成が消失したと主張する。そして、小節においては、主語と述語の形態的一致の消失の帰結として、叙述を認可する機能範疇Pred(ication) が出現し、それによって小節がフェイズとしての位置付けを確立したので、再構成が消失したと主張する。

(5) a. control infinitives: reanalysis of the infinitive marker *to* from a lexical category P to a functional category T (cf. Jarad 1997, Tanaka 1994, 1997, 2007)

b. small clauses: rise of a functional category Pred(ication) that licenses predication (cf. Tanaka 2003, 2010, Tanaka and Yokogoshi 2010)

2. コントロール不定詞節における再構成

2.1. 基本的事実

(6) の引用に示されるように、古英語と中英語のコントロール不定詞節における再構成現象が、いくつかの先行研究において観察されている。(6a) は古英語、(6b) は中英語の例であるが、そこでは斜体で示したコントロール不定詞節の目的語がかき混ぜによって主節に移動している。

(6) a. and *þæt* *gefremede* *man* gewilnode [to bediglianne]
and that committed crime wanted to conceal
'and wanted to conceal the crime he had committed' (ApT 1. 14 / Los 2005: 177)

b. Fortune *his* *howve* entended [bet to glaze]
fortune his hood intended better to glaze
(Chaucer TC 5. 469 / Wurff 1997: 491)

ここでは、先行研究のデータの不備を補い、英語史における再構成の分布の全体像を明らかにするために、PPCME2、PPCEMEを用いて、中英語と初期近代英語におけるコントロール不定詞節からのかき混ぜについて調査を行った。[1] その際、(7a) に示されるように、不定詞節から移動されたDPが主節動詞、主節目的語、主節を修飾する付加詞などに先行し、主語位置以外の主節の*v*P/TP領域を占める例を収集した。したがって、(7b) に示されるように、不定詞節から移動されたDPが主節主語や動詞第二現象の下で前置された動詞などに先行し、主節のCP領域を占める話題化の例は排除した。以下の2.3節において、かき混ぜと話題化の間には顕著な違いが見られ、かき混ぜがA移動のように振る舞うことを指摘する。

（7）a. scrambling（A-movement）

$[_{CP}[_{TP}$ SUB ··· DP_i ··· V/OB/ADJ ··· [··· t_i ···]]]

b. topicalization (A-bar movement)

$[_{CP}$ DP_i (V) $[_{TP}$ SUB ··· V ··· [··· t_i ···]]]

その調査結果が（8）にまとめられているが、コントロール不定詞節からのかき混ぜは、M1ではある程度頻繁に見られたものの、M2以降ほとんど見られなくなり、E2、具体的には16世紀の後半の例を最後に消失した。（9）にいくつかの例を挙げておく。[2]

（8）Scrambling from Control Infinitives in PPCME2 and PPCEME

M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	Total
27	5	0	1	1	1	0	35

（M1：1150-1250, M2：1250-1350, M3：1350-1420, M4：1420-1500, E1：1500-1569, E2：1570-1639, E3：1640-1710）

（9）a. Ðu *me* þencst wel [to wreiȝen to-fore gode for ðessere senne]
you me think well to accuse before God for this sin
（CMVICES1 9. 94 / M1）

b. if the loue of Iesu shuld growe and encresse in thy desire, *thr thinges*
if the love of Jesus should grow and increase in your desire three things
the nedeth [to haue in mynde]
you needs to have in mind （CMAELR4 18. 484 / M4）

c. from that tyme hytherwarde, was there neuer so vndeuowte a Kinge, that durst that sacred place violate, or so holye a Bishoppe that durste *it* presume [to consecrate]
（MORERIC-E1-P1, 28.68）

2.2. コントロール不定詞節の構造

以上の調査結果を説明する前に、不定詞形態素（infinitival morpheme）の役割に注目しなが

ら、英語史におけるコントロール不定詞節の構造変化について議論する。不定詞形態素の歴史的変遷は（10）にまとめられているが、古英語では原形不定詞の場合に現れる主格・対格形の-anとto不定詞の場合に現れる与格形の-enneが区別されていたが、中英語になるとその区別が消失し、どちらの不定詞の場合も-enまたは-eという形を取るようになり、最終的には16世紀中に消失した。

（10）a. OE: *-an*（nominative/accusative; with bare infinitives）
-enne（dative; with *to*-infinitives）
b. ME: *-en/e*（with bare infinitives and *to*-infinitives）

まず、古英語におけるコントロール不定詞節の構造について考察するが、今から述べる2つの証拠から、古英語における不定詞標識toは前置詞であったと考えられる。第一に、（10）で見たようにtoは後続する不定詞に与格を付与し、それが-enneという形で具現化されていた。第二に、（11）に示されるように、to不定詞節と通常のPPを等位接続することが可能であった。等位接続される要素は同一の範疇でなければならないという標準的な仮定に従えば、この例は古英語のto不定詞節が前置詞であるtoを主要部とするPPであったことを示している。

（11）ut eode ［to his gebede］ oðde ［to leornianne mid his geferum］
out went to his prayer or to study with his comrades
'he went out to give his prayer or to study with his comrades'
（Bede 162. 7 / Kageyama 1992: 99）

以上の証拠から、古英語におけるコントロール不定詞節の構造は、前置詞としてのtoが*v*Pを補部に取る（12）のようになる。

（12）$[_{PP}$ to$[_{vP}$ V***enne-v***$[_{VP}$ t_V ･･･]]]（OE）

Chomsky and Lasnik（1993）、Bošković（1997）、Martin（2001）等の極小主義理論における標準的な分析に従えば、PROは非定形のTによりゼロ格（null Case）を照合されることにより認可される。しかし、（12）ではtoはTの要素ではなく前置詞であり、さらに後で見るように、不定詞節において機能範疇Tの出現を示すいくつかの構文が中英語になって初めて見られるようになったので、古英語の不定詞節にはPROを認可するTが存在しないことになる。したがって、（12）の構造において不定詞節の主語、すなわち外項の位置付けが問題となるが、古英語には明らかにTがないにもかかわらず、顕在的主語が現れない不定詞節が他にも存在する。（13）の構文は、Kayne（1975）がFaire-Par（FP）構文と名付けたフランス語の構文に対応する構文であるが、そこでは使役動詞の原形不定詞補文に顕在的主語が現われていない。ちなみに、コントロール不定詞節の場合とは異なり、（13）の主語の解釈は恣意的、あるいは文脈から復元可能な指示対象を表す。

（13）a. he let halgian þet mynster
he let hallow the minster

'he let ____ hallow the minster' (O.E. Chron. an. 1094 / Visser 1969: 1356)

b. for he makth serche all the contre

for he makes search all the country (Mandeville 127. 20 / ibid.: 1360)

Tanaka (1994, 2007) によれば、FP構文では不定詞節の外項が抑制されており、その効果は Baker, *et al.* (1989) における受動形態素は項であるという提案を、極小主義理論の枠組みにおいて捉え直し、(14) のように不定詞形態素にも拡張することにより説明される。

(14) The infinitival morpheme bears Case and ø-features and functions as an argument iff its Case feature is licensed (via Agree or inherent Case assignment).

(cf. Tanaka 1994, 2007)

(14) を仮定すれば、古英語においてFP構文が可能であったという事実は、以下のように説明される。(13a) の構造である (15) においては、主節の*v*とのAgreeの下で斜体の不定詞形態素が対格を付与され、(14) に従って外項として機能するので、原形不定詞補文に顕在的主語は現れない。[3]

(15) [$_{vP}$ he[$_{v'}$ let-*v*[$_{VP}$ t$_V$[$_{vP}$ halg*ian-v*[$_{VP}$ t$_V$ þet mynster]]]]] (cf. (13a))

また、この分析に従えば、英語史におけるFP構文の消失が直ちに説明される。Visser (1969)、Guasti (1991)、Roberts (1993) によれば、FP構文は16世紀中に消失したが、これは不定詞形態素の消失時期とほぼ一致している。すなわち、16世紀中に不定詞形態素が消失すると、(15) のような派生は不可能となり、さらに、原形不定詞補文はPROを認可するTを持たないので、必ず顕在的主語が現れるようになったと説明される。

以上の議論に基づいて、古英語のコントロール不定詞節の構造である (12) に戻ると、そこでは不定詞形態素がtoによって内在格である与格を付与されるので、(14) に従って外項として機能する。さらに、古英語ではtoに後続する不定詞は常に-enneという語尾を伴って現れていたので、toによる与格付与は義務的であったと考えられる。そうすると、古英語のto不定詞節では、(14) に従って不定詞形態素が必ず外項として機能するので、PRO主語だけでなく顕在的主語も現れることができなかったと予測される。実際この予測は正しく、Fischer (1990)、Kageyama (1992) 等によれば、ラテン語の影響がある場合を除けば、基本的には古英語ではto不定詞を伴うECM構文は許されなかった。

次に、中英語におけるコントロール不定詞節の構造について議論するが、中英語になると機能範疇Tの出現を示唆する (16) のようなto不定詞を伴う構文が観察されるようになった。

(16) *for to* infinitive, perfect infinitive, passive infinitive, split infinitive, ECM infinitive

(cf. Fischer 1990, Gelderen 1993, Kageyama 1992)

最初に挙げたfor to不定詞の出現については、不定詞標識toが前置詞としての意味を失い、その意味を補うために別の前置詞であるforが導入された、というのが伝統的な説明である。さらに、(10) で見たように、中英語ではtoが後続する不定詞に与格を付与しなくなり、このこともtoが前置詞としての位置付けを失ったことを示している。ここでは、Jarad (1994)、Tanaka (1994, 1997,

2007）等に従って、中英語においてtoが語彙範疇Pから機能範疇Tへ変化したと仮定するが、この変化はtoの意味の漂白によって生じた典型的な文法化（grammaticalization）の事例であると考えられる。以上の議論から、中英語におけるコントロール不定詞節の構造は（17）のようになり、そこではtoが機能範疇Tへと変化した結果、不定詞主語としてPROが認可されるようになった。

（17）$[_{TP}\ PRO_i[_{T'}\ to[_{vP}\ t_i[_{v'}\ V\text{-}v[_{VP}\ t_V\ \cdots]]]]]$（ME）

しかし、（10）で見たように、16世紀までは不定詞形態素が存在していたので、中英語においてもそれがtoによる格付与の下で外項として機能する可能性が残されている。実際、（18）に示されるように、to不定詞節と通常のPPが等位接続されている例が中英語にも見られることから、古英語のようなtoによる義務的な内在格付与はなくなったものの、（17）と共に（19）の構造も存続しており、そこではtoによる格付与の下で、不定詞形態素が外項として機能することができたと仮定する。Kemenade（1987）、Allen（1995）によれば、中英語になると前置詞は構造格を付与するようになったので、（19）では前置詞としてのtoがAgreeの下で不定詞形態素に構造格を付与すると仮定する。

（18）Ion mouyde men［to mekenesse］and［to þenke on þe day of dom］, ･･･
John moved men to meekness and to think on the day of doom
（Wycl. Serm. Ⅲ 128. 32 / Denison 1993: 189）

（19）$[_{PP}\ to[_{vP}\ V\textit{en}/\textit{e-v}[_{VP}\ t_V\ \cdots]]]$（ME）

2.3. かき混ぜの歴史的変遷

以上のコントロール不定詞節の構造変化に基づいて、2.1節で見たかき混ぜに関する歴史的変遷について説明を試みるが、そのためにはかき混ぜがどのような種類の移動操作であるのかを明らかにする必要がある。ここでは、ECM不定詞節からのかき混ぜと話題化に関する中英語のデータをPPCME2から集め、その振る舞いの違いに注目する。前節で見たように、to不定詞を伴うECM不定詞節は中英語に初めて見られるようになったため、それだけでは十分な例の数を確保できないので、この調査には原形不定詞を伴うECM不定詞節、すなわち使役動詞や知覚動詞の選択する顕在的主語を伴う原形不定詞補文も含めることにした。（20）は他動詞を伴うECM不定詞節からのかき混ぜの調査結果をまとめたものであるが、ECM目的語のかき混ぜはM1の2例のみであり、残りはすべてECM主語のかき混ぜの例である。さらに、その2例のうちの1例では等位構造において主節主語が省略されているので、ECM目的語の移動先が明らかではなく、話題化の可能性も残されている。したがって、（21）に示されるように、ECM主語を越えるECM目的語のかき混ぜは事実上不可能であったと考えられる。これが正しいとすると、かき混ぜはA移動のように振る舞うことになるが、ここでは暫定的に、（22）に述べたように、かき混ぜは主節の*v*とのAgreeの下で生じると仮定する。そうすると、主節の*v*がAgreeの下でECM主語に格を付与するECM不定詞節においては、不完全介在条件（defective intervention condition；DIC）

により主節の*v*とECM目的語の間のAgreeは成立しないので、ECM目的語のかき混ぜが許されないことが説明される。[4]

(20) Scrambling from ECM Infinitives with Transitive Verbs in PPCME2

	M1	M2	M3	M4	Total
ECM subject	18	6	2	0	26
ECM object	2(1)	0	0	0	2(1)

(21) *$[_{TP}$ SUB$[_{T'}$ T ··· OB ··· V-*v* ··· $[_{vP/TP}$ SUB ··· V-*v*$[_{VP}$ t_V $t_{OB}]]]]$

(22) Scrambling is an instance of A-movement triggered by an Agree relation with *v*.

これに対して、ECMs不定詞節からの話題化の調査結果が（23）にまとめられているが、例の総数は少ないものの、ECM主語だけでなくECM目的語も話題化により移動することができる。（24）に見られるように、話題化はAバー移動であり、Cの［topic］素性、あるいはChomsky（2008）における末端素性（edge feature; EF）により駆動されるので、ECM主語を越えるECM目的語の話題化は許される。

(23) Topicalization from ECM Infinitives with Transitive Verbs in PPCME2

	M1	M2	M3	M4	Total
ECM subject	2	0	1	0	3
ECM object	1	1	1	1	4

(24) $[_{CP}$ OB$[_{C'}$ C[topic/EF]$[_{TP}$ SUB ··· T ··· V-*v* ··· $[_{vP/TP}$ SUB ··· V-*v*$[_{VP}$ t_V $t_{OB}]]]]]]$

以上の仮定を念頭において、コントロール不定詞節からのかき混ぜについて考察する。(25)は、コントロール不定詞節がPPであるとする、(12) および (19) の構造に基づくかき混ぜの派生を示しているが、そこではコントロール不定詞節の目的語が主節の*v*とのAgreeの下で［Spec, *v*P］に移動している。

(25) you$_i$$[_{vP}$ me$_j$$[_{vP}$ $t_i$$[_{v'}$ think-*v*$[_{VP}$ well $t_V$$[_{PP}$ to$[_{vP}$ accuse-*v*$[_{VP}$ t_V t_j before God for this sin]]]]]]]

(cf. (9a))

この派生において問題となるのは、不定詞節の*v*Pを越える移動が、(26) のフェイズ不可侵条件（Phase Impenetrability Condition；PIC）に違反しているのではないかという点である。前節で見たように、(12) と (19) の構造においては、前置詞であるtoの格付与の下で不定詞形態素が外項として機能する。したがって、［Spec, *v*P］には外項が現れることはなく、受動形態素が外項として機能する受動文におけるのと同様に、外項が抑制されていると言うことができる。このことから、(27) に述べたように、(12) と (19) における不定詞節の*v*Pは、受動文の*v*Pと同様にフェイズではないと仮定することができる。

(26) In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α, only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky 2000: 108)

(27) The infinitival *v*P is not a phase where the external argument is realized as the infinitival

morpheme, like the passive *v*P where the external argument is realized as the passive morpheme.

この仮定に基づけば、(25) において主節の*v*と不定詞節の目的語の間にはフェイズが介在しないので、かき混ぜはPICに違反することなく適格となる。以上の議論が正しいとすると、(19) の構造が利用可能な限りにおいて、コントロール不定詞節からのかき混ぜが許されることになるが、この構造は外項としての不定詞形態素の存在に依存しているので、16世紀における不定詞形態素の消失によって利用不可能になった。したがって、2.1節で見たように、コントロール不定詞節からのかき混ぜが16世紀中に消失したという事実が説明される。

一方、前節で見たように、中英語において不定詞標識toが機能範疇Tへと変化した結果、不定詞主語としてPROが認可されるようになり、(17) に示したコントロール不定詞節の構造が利用可能になった。以下では、中英語になって初めて不定詞主語としてのPROが出現したことを支持する2つの証拠、(28) について議論する。

(28) a. the rise of subject-relation infinitival relatives (cf. Kageyama 1992)
(e.g. many years to come, a man to fix the car, etc.)
b. the rise of *pro*-infinitives (cf. Gelderen 1993)
(e.g. John was not sure he could leave, but he tried to.)

1つ目の証拠は (28a) の主語関連不定詞関係節、すなわち先行詞が関係節としての不定詞節の主語に対応する構文の出現である。Visser (1966) によれば、主語関連不定詞関係節は古英語では観察されなかったが、12世紀に初めて出現し、14世紀になると頻繁に見られるようになった。古英語において主語関連不定詞関係節が許されなかったという事実の説明については、基本的にはKageyama (1992) の分析に従う。KageyamaはWilliams (1980) に従って、主語関連不定詞関係節は空演算子移動を含んでおらず、不定詞主語としてのPROが先行詞と関係節の間の叙述関係を確立するための述語変項 (predicate variable) として機能すると論じている。ここでの分析に従えば、古英語における主語関連不定詞関係節の構造は (29) のようになる。

(29) *$[_{DP}$ a man$][_{PP}$ to$[_{vP}$ fix-***enne-v***$[_{VP}$ t_V the car$]]]$ (OE)

(29) では不定詞形態素が外項として機能し、述語変項としてのPROが存在しないので、先行詞と不定詞関係節の間に叙述関係が確立されず非文法的となる。その後、中英語において不定詞標識toがTへと変化した結果、不定詞主語としてのPROが認可されるようになり、主語関連不定詞関係節の構造は (30) のようになった。

(30) $[_{DP}$ a man$]_i[_{TP}$ $PRO_i[_{T'}$ to$[_{vP}$ $t_i[_{v'}$ fix-***v***$[_{VP}$ t_V the car$]]]]]_i$ (ME)

(30) では不定詞主語のPROが述語変項として機能し、同一指標付けによって示される叙述関係が成立するので、中英語における主語関連不定詞関係節の出現が説明される。

次に、2つ目の証拠は (28b) の代不定詞、すなわち不定詞標識toを残してその補部が削除されている構文の出現である。Gelderen (1993) によれば、代不定詞は1300年頃に観察されるよ

うになった。Lobeck（1995）、Bošković（1997）、Martin（2001）等によれば、削除は機能範疇による認可を必要とするが、代不定詞にはさらに厳しい条件が課せられており、(28b)、(31）に示されるように、代不定詞はコントロール不定詞節においてのみ許され、ECM不定詞節においては許されない。

(31）*John believes Mary to know French, but Peter believes Jane to.　（Bošković 1997: 12）

この対比が極小主義理論の下でどのように説明されるべきかは今後の課題とするが、Bošković（1997)、Martin（2001）に従って、ECM不定詞節とコントロール不定詞節におけるTの特性の違いに還元することができると仮定する。すなわち、(32）に述べたように、完全なø素性を持ち、ゼロ格を照合することができるコントロール不定詞節のTのみが、代不定詞、すなわち*v*Pの削除を認可することができると仮定する。

(32）*v*P deletion is licensed only by the control infinitival T with the complete set of ø-features that can check null Case, but not by the defective ECM infinitival T that cannot check null Case.　（cf. Bošković 1997, Martin 2001）

以上の議論が正しいとすると、代不定詞の出現は不定詞標識toがゼロ格を照合する機能範疇Tへ変化したことの帰結として説明されるので、中英語において不定詞主語としてのPROが出現したことが支持される。[5]

以上、(28）に挙げた2つの構文が出現した時期から判断すると、不定詞主語としてのPROは初期中英語に利用可能となり、14世紀初めには確立されたと考えられる。その結果、コントロール不定詞節の構造が（17）のようになり、(33）に示されるように、そこからのかき混ぜが不可能となった。

(33）*$[_{TP}$ PRO$_i$$[_{T'}$ to$[_{vP}$ t$_i$$[_{v'}$ V-*v*$[_{VP}$ t$_V$ OB]]]]]

(33）では不定詞形態素ではなくPROが外項として［Spec, *v*P］に基底生成されるので、不定詞節の*v*Pはフェイズとなり、この構造に基づくかき混ぜはPICに違反する。さらに、(33）のかき混ぜは［Spec, TP］にあるPROを越えるので、DICにも違反する。2.1節で見たように、コントロール不定詞節からのかき混ぜはM2以降ほとんど見られなくなり、16世紀中には消失した。このことは、いったん（17）の構造が初期中英語に出現し14世紀初めに確立されると、急速に古い（19）の構造に代わって優勢になったことを示している。

この節のコントロール不定詞節からのかき混ぜに関する議論を要約する。まず、古英語と中英語においては、前置詞としてのtoによる格付与の下で不定詞形態素が外項として機能していたので、(12）および（19）の構造に基づいてコントロール不定詞節からのかき混ぜが許されていた。一方、toの機能範疇Tへの変化によって、不定詞主語としてのPROを含む（17）の構造が初期中英語に出現し14世紀初めに確立されると、古い構造に代って優勢になったため、コントロール不定詞節からのかき混ぜは急激に減少した。その後、16世紀中に不定詞形態素が消失すると、

(17) の構造に一本化されたので、コントロール不定詞節からのかき混ぜという再構成現象は完全に消失したのである。

3. 英語史における小節再構成

この節では、小節における主語と述語の語順に注目し、Stowell (1991) がイタリア語の小節に関して提案した顕在的な小節再構成 (small clause restructuring) が、初期の英語においても観察され、その後の消失は小節の構造変化、特に叙述を認可する機能範疇Pred(ication) の出現によって説明されると主張する。初期の英語では、(4) のイタリア語の例に見られるような小節述語の内部からの接語化は観察されないが、小節の主語と述語の語順が比較的自由であった。以下で紹介するPPCME2、PPCEMEから得られたデータの大部分が、形容詞述語を伴う小節であったので、まず、形容詞述語を伴う現代英語の小節における主語と述語の語順について考察する。

Aarts (1992) によれば、現代英語における小節の主語と述語の語順は、主語の右方移動、すなわち重名詞句転移 (Heavy NP Shift) によって倒置することが可能であるが、それには厳しい条件が課せられる。詳しい議論は省略するが、小節主語の右方移動が許されるためには、小節述語よりも重くなければならないが、それに加えて、(34) に示されるように、小節述語が主要部である形容詞のみからなる場合には、限定詞と主要部名詞からなる小節主語はそれを越えて右方移動することができない。

(34) a. He considered [her country] [beautiful].
b. *He considered [beautiful] [her country]. (Aarts 1992: 136)

しかし、これには例外があり、Bolinger (1971) によれば、主節動詞が使役動詞、特にmakeであり、全体として「存在・出現」の意味を表す (35a,b) のような場合には、限定詞と主要部名詞からなる小節主語は、主要部である形容詞のみからなる小節述語を越えて右方移動することができる。しかし、そのような場合でも、(35c) のように小節の主語と述語が同じ重さ、ここでは2つとも主要部のみから構成されているが、そのような例では倒置語順は許されない。

(35) a. It's always wise to make [your intentions] [clear].
b. It's always wise to make [clear] [your intentions].
c. *It's always wise to make [clear] [intentions]. (cf. Bolinger 1971: 78)

3.1. 基本的事実

以下ではTanaka and Yokogoshi (2010) の調査結果を紹介するが、現代英語における小節の主語と述語の倒置語順に関する右方移動分析を採用し、同様の条件が初期の英語にも当てはまると仮定すると、PPCME2、PPCEMEから得られた中英語と初期近代英語のデータの中には、現

代英語では許されない、すなわち小節主語の右方移動によって派生することができない倒置語順が観察される。まず、(36a) は使役動詞を伴わず、全体として「存在・出現」の意味を表さないにもかかわらず、限定詞と主要部名詞からなる小節主語が主要部である形容詞のみからなる小節述語に後続しており、現代英語の (34b) とは異なり倒置語順が許されている。また、(36b) は使役動詞を含み、全体として「存在・出現」の意味を表すが、小節の主語と述語がともに主要部のみから成る同じ重さであるにもかかわらず、現代英語の (35c) とは異なり倒置語順が許されている。さらに、(36c) では小節主語よりも述語の方が明らかに重いにもかかわらず、倒置語順が許されている。

(36) a. the favourite drinking deeper found [speedier] [the operation].
(MILTON-E3-P2, X, 192.203)

b. and did help to make [readie] [diner]: (HOBY-E2-P1, 160.132)

c. ha God, þou madest [rady to þe pouer in swetnes] [nedful þinges].
Ha God you made ready to the power in sweetness needful things
(CMEARLPS, 78.3421: M2)

このような例はM1からM3を中心に20例見つかったが、小節主語の右方移動によって派生することができず、したがって、小節述語の左方移動の存在を示している。

さらに興味深いことに、現代英語では全く容認されない (37) のような例が9例見つかったが、そこでは小節述語の主要部がその補部から離れて小節主語の前に現れている。

(37) a. and especially make [clean] [his throat] [from the grass and weeds that are usually in it] (WALTON-E3-P1, 218.15)

b. and made [full] [hor sackes] [with corne],
and made full her sacks with corn (CMMIRK, 99.2674: M34)

c. The whiche by reasons holde [torne] [theyr face] [from the worlde],
the which by reasons hold torn their face from the world
(CMINNOCE, 11.182: M4)

このような例も小節主語の右方移動によって説明することができず、(36) に見られる小節述語全体の左方移動とは異なり、小節述語の主要部のみが左方移動によって小節主語の前に現れていると考えられる。

したがって、初期の英語には小節述語に対して適用される2種類の左方移動、すなわち述語全体の移動と述語の主要部のみの移動が存在することになる。これらの移動、特に後者の移動は、Stowell (1991) の提案する小節再構成と同様の操作であると考えられるが、実際にこれらの移動により小節述語、あるいはその主要部が主節に移動していることを示す証拠がある。(38a, b) においては、太字で示されている、それぞれ主節を修飾する副詞と呼格の要素が小節の述語と主語の間に現れているので、これらの例は、小節述語、あるいはその主要部が小節を離れて主節へ

と左方移動していることを支持する。

（38）a. Þe rytfulnesses of our Lord ben makand［ioyful］**ryȝtlich**［þe hertes］,
the righteousness of our Lord are making joyful rightly the hearts
（CMEARLPS, 21.825: M2）

b. Hald［hehe］**lauerd**［min heorte］ich biseche þe in treowe bileue.
hold high lord my heart I beseech you in true belief
（CMMARGA, 57.36: M1）

3.2. 小節の構造

次に、初期の英語においてなぜ小節再構成が可能であったのかを説明する前に、英語史における小節の構造変化について議論する。まず、現代英語の小節については、Bowers（1993）に従って、その範疇は叙述を認可する機能範疇Pred（ication）を主要部とするPredPであると仮定するが、その内部構造については、Svenonius（1996）の方針に沿った（39）の構造を採用し、小節主語は述語の内部、具体的にはその指定部に基底生成され、PredのEPP素性を満たすために［Spec, PredP］に移動すると仮定する。

（39）I consider［$_{PredP}$ your country$_i$［$_{Pred'}$ Pred［$_{AP}$ t$_i$［$_{A'}$ beautiful］］］］（cf. Svenonius 1996）

このような構造を支持する3つの証拠がある。第一に、Bowersによれば、（40）の小節に見られるasはPredを音声的に具現化したものであり、小節の範疇がPredPであることを支持する。

（40）a. I consider him as my best friend.
b. I regard him as intelligent.

第二に、Sportiche（1988）における遊離数量詞の分析に従えば、（41）の例は小節主語の基底生成位置がPredの右側、すなわち述語の内部であり、それが数量詞を残してPredの左側に移動することを示している。

（41）The cat considers the kids as all hopeless cases.（Starke 1995: 242）

この移動はPredのEPP素性を満たすために起こると考えられるが、このことは（42）に見られる小節におけるEPP効果の存在からも支持され、そこではPredのEPP素性を満たす要素が他にないために、虚辞のitが義務的に［Spec, PredP］に挿入されると分析される。

（42）I consider（*it）possible that John will win the race.

このように現代英語においては、小節内に機能範疇Predが存在することを示す3つの証拠、すなわちPredの音声的具現形としてのas、PredのEPP素性を満たすための小節主語の移動によって生じる遊離数量詞、およびPredのEPP素性を満たす最終手段としての虚辞のitが見られる。以下では、小節の構造変化を明らかにするために、これらの証拠が初期の英語において見られるかどうかを検証する。まず、1つ目のasの分布については、Visser（1963）、Tanaka（2003）の観察によると、asは古英語と初期中英語の小節には存在せず、14世紀に初めて出現し、その

後初期近代英語の間に徐々に定着し、18世紀中には現代英語とほぼ同様の分布を示すようになった。第二に、PPCME2, PPCEMEを用いたTanaka and Yokogoshi（2010）の調査によれば、小節主語と結びつく遊離数量詞はM3、すなわち14世紀後半に出現した。[6] 第三に、Tanaka（2003）におけるCD-ROM版のOEDに基づく調査結果（43）によれば、thinkが選択する小節において、虚辞のitは14世紀に初めて見られるようになり、15世紀から16世紀にかけてitを伴わないパターンをその数において逆転した。その後の16世紀から18世紀においては顕著な変化がないように見えるが、thinkが選択する現代英語の小節においても、think fit, think good, think properのようなitが省略される場合があることを考慮に入れる必要がある。16世紀から18世紀におけるitを伴わないパターンのうち、現代英語ではitの省略が許されない例の数が括弧内に示されているが、18世紀におけるitを伴わないパターンは、3例以外のすべてが現代英語でもitの省略を許すものに限られている。したがって、18世紀中には小節において虚辞のitが、（現代英語と同様に）一部のパターンを除いて義務的になったと結論付けられる。

（43）The Distribution of Expletive *It* in Small Clause Complements to *Think* in OED2 on CD-ROM

	14c	15c	16c	17c	18c
With *it*	1	3	140	201	141
without *it*	6	6	81（41）	119（21）	81（3）

（cf. Tanaka 2003: 298）

以上の観察から、古英語と初期中英語では小節において機能範疇Predの存在を示す証拠はなく、小節は述語である語彙範疇のみから構成されていたと考えられる。その後14世紀になると、Predの存在を示す3つの証拠が見られるようになったが、虚辞のitの分布を考慮すると、18世紀まではPredを持たない小節の構造も存続していたことが分かる。したがって、英語史における小節の構造変化は（44）のようになる。

（44）The Structure of Small Clauses in the History of English

a. $[_{XP}$ DP$[_{X'}$ X ･･･]]（OE-18c）

b. $[_{PredP}$ DP$_i[_{Pred'}$ Pred$[_{XP}$ t$_i[_{X'}$ X ･･･]]]]$（14c-）　（cf. Tanaka and Yokogoshi 2010）

3.3. 小節再構成の歴史的変遷

（44）で提案した小節の構造変化に基づいて、小節再構成の歴史的変遷について説明を試みる。3.1節で見たように、英語史における小節再構成には、小節述語全体の移動と小節述語の主要部のみの移動の2種類があり、M1からM3までの例が多いものの、初期近代英語の終わりまで観察される。まず、（44a）の構造に基づく小節述語全体の移動が（45）に示されているが、ここでは、暫定的にその移動は*v*の［topic］素性（あるいはChomsky（2008）における末端素性）によって駆動されると仮定する。小節主語が主節の［Spec, VP］に移動するか否かによって、XP全体、

あるいはX'のみが移動する可能性があるので、点線で2通りの可能性を示しておくが、いずれの移動もフェイズを越えないので適格となる。

(45) predicate movement (triggered by the [topic] feature/EF of *v*)

$[_{vP}\ \mathrm{XP/X'}[_{v'}\ v[_{VP}(\mathrm{DP_i})[_{V'}\ \mathrm{V}[_{XP}(\mathrm{DP_i})[_{X'}\ \mathrm{X}\cdots]]]]]]$

次に、(44a) の構造に基づく小節述語の主要部のみの移動が (46) に示されているが、暫定的にその移動はVおよび*v*の何らかの素性によって駆動されると仮定する。(46) では、小節述語の主要部が連続循環的にVを経由して*v*に移動しているが、この移動もフェイズを越えないので適格となる。

(46) predicate head movement (triggered by some feature of *v*/V)

$[_{vP}\ v\text{-}[\mathrm{V\text{-}X}][_{VP}(\mathrm{DP_i})[_{V'}\ t_V[_{XP}\ (\mathrm{DP_i})[_{X'}\ t_X\ \cdots]]]]]$

したがって、(44a) の構造が利用可能な限りにおいて小節再構成が許されていたことになり、初期近代英語の終わりまで (36)−(38) のような例が観察されることが説明される。[7]

次に、(44b) の構造に基づく小節再構成の可能性について考察するが、その際に重要となるのは現代英語の小節の範疇であるPredPがフェイズであるか否かである。Bowers (2002)、Yokogoshi (2003) はPredPがフェイズであると主張しているが、そこで議論されている証拠に加えて、今から述べる3つの証拠がその主張を支持すると考えられる。まず第一に、PredPは機能範疇Predが語彙範疇の投射である小節述語を選択しているという点において、Chomsky (2001) が提唱するF-XPというフェイズの構造形に合致する。第二に、フェイズは音韻的に独立しており、移動適用の単位になるとするChomsky (2001, 2004) の考えが正しければ、John happy, I want.のような例において小節が移動可能であるという事実は、それがフェイズであることを示唆する。第三に、Chomsky (2004, 2008) では、フェイズは格・一致が決定される領域であり、フェイズ主要部がprobe-goal関係に基づいて解釈不可能素性の値付けを行うと仮定されている。この仮定が正しければ、ロシア語、ハンガリー語、フィンランド語のように、小節述語が主語とは異なる格を持つ言語の存在からも、PredPがフェイズであることが支持される。すなわち、Predがフェイズ主要部として小節述語に格付与しており、いくつかの言語においてそれが顕在化されることがあると分析される。

PredPがフェイズであるという仮定の下で、(44b) の構造に基づく小節再構成の可能性について考察する。(47) は小節述語全体の移動、(48) は小節述語の主要部のみの移動を示しているが、いずれの移動もフェイズ主要部であるPredの領域から行われているので、PICに違反し不適格となる。

(47) $^{*}[_{vP}\ \mathrm{XP/X'}[_{v'}\ v[_{VP}(\mathrm{DP_i})[_{V'}\ \mathrm{V}[_{PredP}(\mathrm{DP_i})[_{Pred'}\ \mathrm{Pred}[_{XP}(\mathrm{DP_i})[_{X'}\ \mathrm{X}\cdots]]]]]]]$

(48) $^{*}[_{vP}\ v\text{-}[\mathrm{V\text{-}X}][_{VP}(\mathrm{DP_i})[_{V'}\ t_V[_{PredP}(\mathrm{DP_i})[_{Pred'}\ \mathrm{Pred}[_{XP}\ t_i[_{X'}\ t_X\ \cdots]]]]]]$

したがって、18世紀中に（44a）の構造が消失し、（44b）の構造に一本化されることによって、小節がフェイズとしての位置付けを確立し、小節再構成が消失したと説明される。

3.4. Predの出現の要因

最後に、なぜ小節内にPredが出現したのかという問題について、叙述理論の観点から考察する。本論文では、Bowers（1993）、Svenonius（1996）に従って、現代英語の小節は叙述を認可する機能範疇Predを主要部とするPredPであると仮定している。その意味においては、叙述は機能範疇によって認可されなければならないという、最近の例としてはDikken（2006）に代表されるタイプの叙述理論に従っていると言うことができる。しかし、この節で論じたように、古英語と初期中英語における小節内に、Predを含む機能範疇が存在することを示す経験的証拠はないので、叙述は常に機能範疇による認可を必要とするという強い仮説を維持することはできない。したがって、ここではPredを含めた機能範疇による叙述の認可に加えて、（49）に示されるように、主語と述語の形態的一致が叙述を認可すると提案する。すなわち、主語と述語が形態的に一致していれば、両者の間の叙述関係を読み取ることができ、機能範疇がなくても叙述が認可されると仮定する。この提案は、Gueron and Hoekstra（1995）、Dalmi（2005）等で提唱されている機能範疇Agrによる叙述の認可を、Agrを用いない認可方法として再定式化したものであると言うことができる。[8]

（49）Two Modes of Licensing Predication

a. functional categories including Pred （cf. Bowers 1993, Svenonius 1996, Dikken 2006）

b. morphological agreement between subjects and predicates

（cf. Guéron and Hoekstra 1995, Dalmi 2005）

なぜ小節内にPredが出現したのかという問題に戻ると、古英語から初期中英語においては、形容詞はそれが修飾あるいは叙述する名詞句と数、性、格に関して形態的一致を示しており、古英語の例である（50）においても、小節の主語と述語の間に形態的一致が観察される。

（50）heo afunde þone hring gehalne

she found the ring-ACC whole-M.SG.ACC

‘she found the ring whole’ （Ælfric Hom. II. 28 / Visser 1963: 553）

Lass（1992）によれば、初期中英語には形容詞の強変化において性と格、弱変化においてすべての屈折が消失し、14世紀中には強変化における数の区別も消失した。したがって、中英語、特に14世紀中には小節の主語と述語を結びつける形態的一致がなくなったので、それに代わって機能範疇Predが出現し、小節における叙述を認可するようになったと考えられる。

4．結　　語

本論文では、極小主義理論の枠組みにおいて、非定形節における機能範疇の出現という観点から、英語史における再構成の分布に関する説明を試みた。まず、中英語における不定詞標識toの語彙範疇Pから機能範疇Tへの変化によって、コントロール不定詞節がフェイズとしての位置付けを確立し、PRO主語を持つようになった結果、かき混ぜという再構成現象が消失したことを論じた。次に、小節における主語と述語の形態的一致の消失によって、叙述を認可する機能範疇Predが出現し、小節がフェイズとしての位置付けを確立したので、小節再構成が消失したと主張した。

以上の結論が正しければ、英語史における非定形節という領域において、（51）に述べる2つのタイプの機能範疇創発の事例が存在することになる。

（51）Two Types of Functional Category Emergence

a. reanalysis of a lexical category to a functional category（grammaticalization; cf. Lightfoot 1979, Roberts 1993, Roberts and Roussou 2003）

b. rise of a functional category, which does not result from reanalysis of an existing lexical category（cf. Gelderen 1993, Osawa 2003）

コントロール不定詞節における機能範疇の出現は、toが前置詞としての意味を失った結果生じた典型的な文法化の事例であり、その他の代表例としては、（51a）に挙げた文献で議論されている、法助動詞やdoの本動詞から助動詞への変化が挙げられる。それに対して、小節における機能範疇の出現は既存の語彙範疇が機能範疇に変化したのではなく、主語と述語の形態的一致の消失という形態変化によって、叙述を認可する新たな機能範疇が生じたというものである。このタイプの機能範疇の出現については、Gelderen（1993）、Osawa（2003）においていくつかの事例が報告されているが、特にここでの提案と関連が深いのは、Osawaによる機能範疇Dの出現に関する議論である。彼女によれば、古英語には限定詞は存在しなかったが、名詞の格屈折の消失の結果、Higginbotham（1985）の意味における名詞のR項を束縛する機能範疇Dが出現した。したがって、ここでの議論が正しければ、文法化ではない、純粋に形態統語変化の帰結としての機能範疇の出現の事例が存在するという、GelderenやOsawaの仮説をさらに強化することになる。ただし、GelderenやOsawaで議論されているのは、法助動詞やdo、あるいは限定詞の歴史的発達という典型的な文法化の事例であり、そのような事例が機能範疇の出現という観点から分析されるというのが彼女らの主張である。それに対して、本論文で取り上げた小節における機能範疇Predの出現に関わる言語現象は、いずれも文法化の事例であるとは考えられないので、形態統語的要因による機能範疇の出現を示唆する非常に稀な事例であると言うことができる。

注

*本論文は、日本英語学会第24回大会シンポジウム（2006年11月4日、於東京大学）における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。シンポジウムのメンバーである、槙田裕加氏、水野江依子氏、宮下治政氏には、発表に際して貴重な助言やコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表する。また、本論文は科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号23520581）の研究成果の一部である。

1．中英語では原形不定詞もコントロール構文に現れることができたが、この調査はto不定詞を伴うコントロール構文のみを対象とする。原形不定詞を伴うコントロール構文からのかき混ぜのデータ、およびその分析については、Tanaka（2009）を参照のこと。
2．コントロール不定詞節から移動されるDPの種類、すなわち完全名詞句と代名詞の違いにより、特に分布の差が観察されなかったので、この調査では両者を区別せず、全てかき混ぜの例として扱うことにする。
3．現代英語と同様に、古英語にも顕在的主語を伴う原形不定詞補文が存在し、顕在的主語は対格を付与されるが、ここではTanaka（2010）に従い、主節の*v*とのMultiple Agreeの下で顕在的主語と不定詞形態素の両方が対格を付与されると仮定する。そうすると、そのような原形不定詞補文には2つの外項が存在するように見えるが、一部のロマンス語で見られる接語重複（clitic doubling）、すなわち接語とそれに対応する完全名詞句が同時に現れる構文と同様に扱うことができるかもしれない。
4．他動詞を伴うECM不定詞節では外項が［Spec, *v*P］に現れ、その*v*Pはフェイズとなるので、（21）のかき混ぜは以下の（26）で見るフェイズ不可侵条件にも違反することになる。
5．Chomsky（2008）によれば、ファイ素性はフェイズ主要部C/*v*からその補部の主要部T/Vに継承される。この考えが正しいとすると、格付与はAgreeの下で行われるので、ゼロ格の照合はCからTへ継承されたファイ素性に関するAgreeの下で行われることになる。また、Emoto（2007）は削除がフェイズ主要部から継承された［+silence］素性により認可されると主張し、範疇がCPであるコントロール不定詞節においては、CからTへ継承された［+silence］素性により*v*Pの削除が認可されると述べている。以上2つの考えに従えば、中英語のコントロール不定詞節では機能範疇Tに加えてCも出現し、CからTへの素性継承の下で不定詞主語PRO、および*v*Pの削除が認可されるようになったと分析できるかもしれない。
6．実際には、allが小節内に遊離しているように見える例がM1とM2でも見つかったが、それらの例では小節主語がすべて単数であったので、allは小節主語と結びつく遊離数量詞ではなく、She was dressed all in white.のような例に見られる、強意の副詞としてのallであると判断することができる。
7．古英語では小節述語が対格で標示されていたという事実に基づき（以下の（50）を参照）、Tanaka and Yokogoshi（2010）では、小節再構成が主節の*v*/VとのAgreeに基づく移動であると論じられている。
8．Tanaka and Yokogoshi（2010）はMultiple Agreeを用いて、この提案を極小主義理論の枠組みにおいて定式化している。

参考文献

Aarts, Bas (1992) *Small Clauses in English: The Nonverbal Types*, Mouton de Gruyter, Berlin.
Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts (1989) “Passive Arguments Raised,” *Linguistic Inquiry* 20, 219-251.
Bolinger, Dwight (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA.
Bowers, John (1993) “The Syntax of Predication,” *Linguistic Inquiry* 24, 591-656.
Bowers, John (2002) “Transitivity,” *Linguistic Inquiry* 33, 183-224.
Broekhuis, Hans, Hans den Besten, Kees Hoekstra, and Jean Rutten (1995) “Infinitival Complementation in Dutch: On Remnant Extraposition,” *The Linguistic Review* 12, 93-122.
Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” In R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka

(eds.), *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, MA, 89-155.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," In M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, Cambridge, MA, 1-52.

Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," In A. Belletti (ed.), *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, Oxford University Press, Oxford, 104-131.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," In R. Freiden, C. Otero, and M. Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, MIT Press, Cambridge, MA, 133-166.

Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters," In J. Jakobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Venneman (eds.), *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, Walter de Gruyter, Berlin, 506-569.

Cinque, Guglielmo (2006) *Restructuring and Functional Heads: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 4*, Oxford University Press, Oxford.

Dalmi, Gréte (2005) *The Role of Agreement in Non-Finite Predication*, John Benjamins, Amsterdam.

Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, Longman, London.

Dikken, Marcel den (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, MIT Press, Cambridge MA.

Emoto, Hiroaki (2007) "The Theory of Ellipsis in a Single-Cycle System," *English Linguistics* 24, 319-340.

Fischer, Olga (1990) *Syntactic Change and Causation: Developments in Infinitival Constructions in English*, Ph.D. dissertation, University of Amsterdam.

Gelderen, Elly van (1993) *The Rise of Functional Categories*, John Benjamins, Amsterdam.

Guéron, Jacqueline and Hoekstra (1995) "The Temporal Interpretation of Predication," In A. Cardinaletti and M. Guasti (eds.), *Syntax and Semantics 28: Small Clauses*, Academic Press, New York, 77-107.

Higginbotham, James (1985) "On Semantics," *Linguistic Inquiry* 16, 547-593.

Jarad, Najib (1997) *The Origin and Development of* For-*Infinitives*, Ph.D. dissertation, University of Wales, Bangor.

Kageyama, Taro (1992) "AGR in Old English *To*-infinitives," *Lingua* 88, 91-128.

Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English*, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Second Edition of the Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Lightfoot, David (1979) *Principles of Diachronic Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.

Lobeck, Anne (1995) *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*, Oxford University Press, Oxford.

Los, Bettelou (2005) *The Rise of the* To-*Infinitive*, Oxford University Press, Oxford.

Martin, Roger (2001) "Null Case and the Distribution of PRO," *Linguistic Inquiry* 32, 141-166.

Osawa, Fuyo (2003) "Syntactic Parallels between Ontogeny and Phylogeny," *Lingua* 113, 3-47.

Rizzi, Luigi (1982) *Issues in Italian Syntax*, Foris, Dordrecht.

Rizzi, Luigi (1986) "On Chain Formation," In H. Borer (ed.), *Syntax and Semantics 17: The Syntax of Pronominal Clitics*, Academic Press, New York, 65-96.

Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.

Roberts, Ian and Anna Roussou (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.

Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, 425-449.

Stowell, Tim (1991) "Small Clause Restructuring," In R. Freiden (ed.), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA, 182-218.

Starke, Michel (1995) "On the Format for Small Clauses," In A. Cardinaletti and M. Guasti (eds.), *Syntax and Semantics 28: Small Clauses*, Academic Press, New York, 237-269.

Svenonius, Peter (1996) "Predication and Functional Heads," *WCCFL* 14, 493-507.

Takahashi, Miki (1982) “On Complementation in the History of English,” *Studies in English Linguistics* 11, 59-78.

Tanaka, Tomoyuki (1994) “On the Realization of External Arguments in Infinitives,” *English Linguistics* 11, 76-99.

Tanaka, Tomoyuki (1997) “Minimalism and Language Change: The Historical Development of *To*-Infinitives in English,” *English Linguistics* 14, 320-341.

Tanaka, Tomoyuki (2003) “Expletives, Functional Categories, and Small Clauses in the History of English,” *Studies in Modern English: The Twentieth Anniversary Publication of The Modern English Association*, Eichosha, Tokyo, 295-308.

Tanaka, Tomoyuki (2007) “The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,” *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 25-47.

Tanaka, Tomoyuki (2009) “Scrambling from Infinitival Clauses: A Case Study of Restructuring in the History of English,” In M. Takikawa, M. Kawatsu, and T. Tanaka (eds.), *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*, Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, Tokyo, 475-492.

Tanaka, Tomoyuki (2010) “Agreement, Predication, and the Rise of Functional Categories in Nonfinite Clauses,” *English Linguistics* 27, 374-398.

Tanaka, Tomoyuki and Azusa Yokogoshi (2010) “The Rise of a Functional Category in Small Clauses,” *Studia Linguistica* 64, 239-270.

Visser, Frederikus (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language* (4 vols), E.J. Brill, Leiden.

Williams, Edwin (1980) “Predication,” *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.

Wurff, Wim van der (1997) “Deriving Object-Verb Order in Late Middle English,” *Journal of Linguistics* 33, 485-509.

Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives: Restructuring and Clause Structure*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Yokogoshi, Azusa (2003) “A Syntactic Analysis of Small Clause Particles in English,” *English Linguistics* 20, 518-534.

Abstract

Restructuring and the Rise of Functional Categories in Nonfinite Clauses

Tomoyuki TANAKA

This paper provides a corpus-based investigation of the distribution of restructuring properties in the history of English, and attempts to account for their possibility and subsequent loss in terms of the rise of functional categories in nonfinite clauses. It is shown that the reanalysis of the infinitive marker *to* from a lexical category P to a functional category T in Middle English led to the establishment of the infinitival *v*P as a phase, as well as the introduction of a PRO subject in infinitival clauses, triggering the loss of restructuring, especially scrambling from control infinitives, during the sixteenth century. Then, it is argued that a functional category Pred（ication) arose in small clauses as a consequence of the loss of morphological agreement between their subjects and predicates, which in turn caused the loss of small clause restructuring, manifested as leftward movement of (part of) small clause predicates in early English, during the eighteenth century.